

京都大学若手人材海外派遣事業 ジョン万プログラム（職員派遣）
令和5年度事務職員短期派遣プログラム報告書

研 修 者	職 名	掛員
	氏 名	福井 香厘
研 修 先 等	渡 航 先 国 名	タイ
	研 修 先 機 関 名	京都大学 ASEAN 拠点
	研 修 期 間	令和5年4月7日～令和6年3月27日
具体的な研修内容	<p>平成26年6月、ASEAN地域における研究、教育、国際貢献の深化を支援するため、「京都大学 ASEAN 拠点」がタイ・バンコクに設置された。現在、ASEAN 拠点の構成員は所長、URA、現地スタッフ、事務職員である。このうち、事務職員は本学若手人材海外派遣事業「ジョン万プログラム」の派遣者である。ASEAN 拠点への派遣はこれまで各期間1名のみであったが、令和5年度から2名に増員された。</p> <p>ASEAN 拠点は上述の設置理由に基づき、1. 戦略的国際共同研究の支援、2. 国際教育関係事業の支援、3. 国際ネットワーク形成・基盤強化、4. 国際危機管理の4つのミッションを掲げている。</p> <p>そして、派遣者の業務を大まかに分類すると、経理系の業務と総務系・教務系の業務があるといえる。</p> <p>経理系の業務は、オフィスの存続や活動の維持全般に渡っている。例を挙げると、オフィスのレンタルや電気・水道・ネット・電話の使用、消耗品の購入などオフィスの運営に伴い発生する使用や購入に係る支払を、毎月銀行や店舗の窓口に出向いて行い、本学事務本部とタイの会計事務所に報告した。また拠点の構成員の出張を連絡、報告し状況に応じて立て替えた支出を精算した。</p> <p>総務系・教務系の業務では主に上記2.3. に貢献したと考えている。例を挙げると、タイ国内や各国の機関へ訪問したり、逆にオフィスへの来訪者に対応したりした。また、大使館やJASSO、教育機関が主催するタイおよびASEAN各国の留学フェアに参加してブース対応やプレゼンテーションを行うことで留学生リクルート活動を行ったり、東南アジアネットワークフォーラムをはじめとする本学や関連機関のイベントや同窓会の開催補助を行ったりした。在タイオフィスを持つ大学や関連機関の連絡会については年間を通して事務局を担当し、日時調整や案内、参加者の集計や当日の運営補助を行った。</p>	

★業務中の様子



左：留学フェアでのブース対応の様子

右：科学技術博覧会でのブース対応の様子



左：本学紹介のプレゼンテーションをタイ語で行った様子

右：プレゼンテーションを英語で行った様子



左：連絡会開催中、運営補助を行っている様子

右：シンポジウムの写真撮影を行っている様子

※ASEAN 拠点の Web サイト (<https://www.oc.kyoto-u.ac.jp/overseas-centers/asean/events/>) にもイベントの様子を多数掲載している。

本学の国際
化に対する
研修成果の
活用方法・フ
ィードバッ
ク

個人的な観点から言うと、今回の研修成果は以前より物事を大げさに捉えなくなったことである。

まず、一つ目の例として、本学の業務に対する捉え方の変化について述べる。私は学生時代、タイの言語・文化を専攻し、現地への交換留学も経験した。本研修を実施している本学であれば、事務職員の立場でもタイやASEAN地域とのさらなる関係深化に直接貢献でき、大学4年間の学びが活きるのではと夢見ていた。しかし、本研修への応募の機会が与えられ派遣者に選ばれるまでの数年は担当業務柄、直接対外的な動きに関わることはなかった。今回、今まで未経験だった類の業務を数多く経験し、本学における対外的な活動について外から見えるのはほんのごく一部で、その活動に関して可視化されない多くの業務が陰で行われていることを身をもって知った。それと同時に、対外的で国際的な業務を大げさに捉えず、現実的に本学の業務の一部として見るができるようになった。

次に、二つ目の例として、自身の能力に対する捉え方の変化について述べる。研修に行く前は、研鑽する類の物事は特別に秀でていなければ「できる」というに相応しくないと大げさに考えていた。必要に応じて他者に対し自己アピールをすることはあっても、例えば外国語運用能力の面でいえば、中途半端な自分が「タイ語ができます」などと言うことはおこがましいと内心いつも思っていた。しかし、今回業務内外でタイや各国の方々と話してみると、タイ語も英語も上級レベルではない自分でも予想以上に苦勞なく意思疎通できた。また、逆に流暢な方から単語数個を知っているレベルの方まで日本語で話す機会もあったが、会話の相手側になってみれば、評価することを目的にしていない場合、外国語の運用能力よりこの人が伝えたいことは何なのかということに意識が行くと感じた。その経験から、そもそも何のために外国語を学ぶのか、外国語運用能力が高いほど伝えたいことを相手に負担なくスムーズに高精度で伝えられることは確かだが、能力を高めること自体は最終目的でないと初心に立ち返ることができた。卑下せず今もっている能力はゼロではないと認めて、業務で活かせる場面があればできる範囲で懸命に使うこと、並行して普段から自己研鑽を行っていくことで、最大限能力を活かそうと考えている。

そして、私は現在 Kyoto iUP (Kyoto University International Undergraduate Program) の教務掛の一員として勤務している。

このプログラムについては、研修時に参加したフェアでもいつも宣伝をおこなっていた。その際は、世界各国からの応募者の中から選ばれた優秀な学生という Kyoto iUP 生の属性をどこか遠く感じていた。しかし研修成果をもって直接関わる今は、日本語と専門科目の学習をハイレベルに両立する学生たちを尊敬しつつも、親しみをもって関わることを心がけている。

最後に、今回は学生時代からのタイとのつながりのアップデートとして、私がチューターを担当していた方や、逆に留学中私のチューターを担当していた方などタイの方々に現地で再会し、時にサポートもいただいたことに加え、出張などでタイ国内様々な都市や周辺国を何ヶ国も訪れ、体感として人生で最も短期間でたくさんの新しい出会いがあった。そして年齢や立場などの違いを大げさに捉えず、素で1人の人間として他者を尊重するコミュニケーションを取り合うことができる方々と出会えた。そのような方たちとの会話で心に残っているひとつに、今の時代に大学がある意味は何だかと思うかと聞かれたことがある。私よりも大学について知識も経験もはるかにある方だったため、稚拙な意見を述べることに緊張してしまい、実は、その際になんと答えたかは思い出せない。

ただ、学生時代や本研修を経て、今改めて本学の国際化に対するフィードバックとして意見を一つ述べると、多様な機会を提供できる場であることだと思う。

公的機関として存在を維持し、例えば学生には制度に基づきチューターや交換留学などの機会を提供していることは、それを求める熱意ある学生が安心して多種多様な出会いや経験をして成長できることにつながっている。今後も持続的にそのような機会の提供を行うことは、さらなる交流の広がりや深化につながり、本学の枠に止まらない規模の、未来につながる国際化を推進することにつながると信じている。

上述の意見は結局大げさになってしまったようにも思うが、組織だからこそできることである。事務職員のうちの一人として私ができることは担当業務に真摯に向き合い、そのような組織の運営の一部に貢献することだ。そして、もし将来的に自分に部下ができれば、今までの上司の方々が私に対してそうであったように、望む場合は機会を提供したり、挑戦する熱意を尊重したり、後押しできる人でありたい。



-業務内外でお世話になった、数多くの皆さまの例-

左：日本学術振興会（JSPS）バンコク研究連絡センターの皆さま

右：関係機関のタイ人スタッフの皆さま